

2013 年度 私立大学図書館協会研究助成

「海外図書館事情調査」

「米国の大学図書館の組織開発（OD）と学習支援の諸課題の実証的分析
ーペンシルベニア州の大学図書館の事例研究と POD 年次大会への参加ー」

報告書

2014 年 4 月 30 日

龍谷大学図書館
村上孝弘

目 次

I. 調査概要	1
1. 研究・調査の種類	
2. 調査テーマ	
3. 調査目的	
4. 調査大学	
5. 調査日程	
6. 調査概略	
II. 機関別調査詳細	3
1) Temple University	
2) Drexel University	
3) University of Pennsylvania	
4) Duquesne University	
5) Chatham University	
6) Point Park University	
7) University of Pittsburgh	
8) Carnegie Mellon University	
III. POD 参加報告	29
IV. 結びにかえて	34

I. 調査概要

1. 研究・調査の種類

海外図書館事情調査

2. 調査テーマ

米国の大学図書館の組織開発（OD）と学習支援の諸課題の実証的分析
ーペンシルベニア州の大学図書館の事例研究と POD 年次大会への参加ー

3. 調査目的

本調査は、米国の大学図書館の組織開発（OD）について、学習支援機能の充実に焦点をあてた実証的分析を行うことを目的としている。ODは、**Organizational Development**の略称であり、FD(**Faculty Development**)やSD (**Stuff Development**)を包摂した概念として捉えることができる。すなわち、ODにおいては、大学管理職、大学教員、大学職員の関係性を重視した組織開発が志向されているといえる。ラーニング・コモンズの登場とともに、これからの大学においては、図書館の存在意義が従来に比して格段に重要なものになってきた。わが国においても、学士課程教育の充実と学位の質保証の観点から、図書館はこれまで以上に各教学主体と連携した学習支援機能の充実が求められている。学習成果（ラーニングアウトカムズ）の向上を図るために、図書館における学習支援体制を強化することが重要な課題として浮上している。これらのことから、図書館は他部署から隔絶した存在ではなく、様々な学習支援の連携の拠点として機能していくこと、すなわちODが求められてきているといえよう。

本調査では、学習支援の諸課題について、POD (**Professional and Organizational Development Network in Higher Education**)の年次大会に参加することにより、効果的な収集を行うとともに、ペンシルベニア州の大学図書館のODについて可能な限り事例研究を行いたい。これらのことにより、日本の大学図書館のODや学習支援の具体的な展開について、多くの示唆を得ることを目的としている。

4. 調査大学

- ①Temple University
- ②Drexel University
- ③University of Pennsylvania
- ④Duquesne University
- ⑤Chatham University
- ⑥Point Park University
- ⑦University of Pittsburgh

⑧Carnegie Mellon University

5. 調査日程〔2013年11月3日（日）～2013年11月10日（日）〕

- 1日目：11月 3日（日） 日本出国
ワシントン・ダレス空港 → フィラデルフィア空港
【フィラデルフィア①】
- 2日目：11月 4日（月） AM：Temple University
Drexel University
PM：University of Pennsylvania
フィラデルフィア空港 → ピッツバーグ空港
【ピッツバーグ①】
- 3日目：11月 5日（火） AM：Duquesne University
PM：Chatham University 【ピッツバーグ②】
- 4日目：11月 6日（水） AM：Point Park University
PM：POD 参加 【ピッツバーグ③】
- 5日目：11月 7日（木） AM：University of Pittsburgh
PM：POD 参加 【ピッツバーグ④】
- 6日目：11月 8日（金） AM：Carnegie Mellon University
PM：POD 参加 【ピッツバーグ⑤】
- 7日目：11月 9日（土） ピッツバーグ空港 → シカゴ空港 → 日本へ
- 8日目：11月10日（日） 日本帰国

6. 調査概略

各大学図書館について、事前の資料調査を実施するとともに、実地見学・ヒヤリングを実施した。具体的には、ペンシルベニア州のうち、フィラデルフィアの2大学、ピッツバーグでは6大学を訪問した。訪問大学は、大学種別（Public2校、Private6校）、大学規模（大規模3校、中規模4校、小規模1校）、カーネギー分類（Research6校、Master's2校）等からみても比較的多岐に及んでおり、限られた調査であるが、アメリカの大学図書館の多様性を把握することに努めた。フィラデルフィアもピッツバーグも大都市であるから、都心部近くに大学があり、今回の短期間の調査にあたっても効率的な見学が可能であった。

また、ピッツバーグで開催された POD（Professional and Organizational Development Network in Higher Education）の年次大会に参加し、カーネギーメロン大学の Learning Spaces を見学するなど、アメリカの大学の学習支援の最新事例に触れた。さらに POD ではポスターセッション報告に協力し、現地の FD 関係者との交流を計った。

II. 機関別調査詳細

本章では、調査訪問した 8 大学について、それぞれの大学概要と図書館の運営等の特徴を報告する。なお、大学概要については、「College Board」(大学検索ウェブサイト)や『FOUR-YEAR COLLEGES』(PETERSON'S)から必要な数値や項目を抽出した。

1) Temple University (テンプル大学)

【対応者】

①Mr. Steven J. Bell

(Ed.D/ Associate University Librarian for Research & Instructional Services)

②Mr. Andrew Diamond (Bibliographic Assistant II)

<大学概要>

所在地	ペンシルベニア州 フィラデルフィア
WEB ページ URL	http://www.temple.edu/academics/libraries
創立	1884 年
大学種別	4 年生、大規模、Public、共学
取得できる学位	Certificate、Diploma、Associate、Bachelor's、Master's、Doctoral
カーネギー分類	Research – High Research Activity
立地	巨大都市、都市型、Commuter campus
大学宿舎	1 年生：77%、全学部生：18%
学生数	学部：28,068 名、大学院：9,202 名
学生教員比	14：1
学費	州内出身：\$14,096、州外出身：\$24,122
アカデミック・サポート・サービス	Learning center、Pre-admission summer program、Reduced course load、Remedial instruction、Study skills assistance、Tutoring、Writing center
ア krediyteiyeshonyonkikan	Middle States Association of Colleges and Schools

<図書館の運営等の特徴>

○Paley Library の概要

フィラデルフィアの都心から郊外電車で 10 分ほどのところにメインキャンパスがある公立の大規模大学である。東京に分校があることから日本でも一定の知名度がある。

中央図書館は Paley Library であり、その他に Science and Engineering Library、Ginsburg Health Sciences Library、Ambler Campus Library 等がある。

Paley Library は、キャンパスのほぼ中央に位置する中央図書館であり、1階に Reference Desk、Circulation/Reserve Desk を配し、カフェも設置されている。地階には Media Services Desk や Special Collections Research Center がある。中2階には Classroom130 があり、Smart Board 等のメディア機器が設置されている。ここでは博士号を有している Steven 氏により図書館情報学の授業も実施されており、正課授業と図書館との連携が感じられた。2階、3階は開架書庫と閲覧席となっている。閲覧席は、基本的には Quiet Study Areas となっているが、2階と3階に4室の Group Study Rooms が設けられている。図書館内も含めて学内では3,670台のPCが利用可能となっている。Subject Librarian14名は、図書館内に個室を有しており約60の専門分野に対応している。

○Strategic Plan の策定

テンプル大学図書館では、近くは「Temple University Libraries Strategic Plan 2009-2012」が策定され、計画的な図書館展開が図られている。同文書には Mission、Vision、Values とともに Goals が設定され、図書館のより具体的な長期展望が望まれている。今回の調査テーマである学習支援との関係でいえば、Values の一つとして Learning が次のように定義づけられ、場所に限定されない学習支援が目指されている。

We support all learners of all kinds and collaboratively integrate the libraries wherever learning takes place. (下線は筆者)

さらに、Goals の一つとして Teaching&Learning との関係が次のように記されている。

Position the Library as an active partner with faculty in achieving mutual goals for enabling to strengthen research and critical thinking skills. (下線は筆者)

この背景には、academic research に際して search engines や non-library tools に頼っている学生の現状があり、日本の大学と同様の問題意識となっている。

○図書館における学生の活用と参加

図書館における学生の活用も積極的である。3日夜に見学した際の Andrew 氏の説明によれば、Student Worker というかたちで学生雇用も推進されているとのことである。図書館には Library Student Assistants 制度があり、赤いベストを着用した学生がサービス業務に従事している。

また図書館運営についても Student Library Advisory Board が設けられており学生参加が保障されている。院生5名と学部生3名と図書館長から構成されるこの委員会は、図書館政策に対する学生の意見集約の重要な場となっている。

○Learning Center や Writing Center と図書館

Paley Library に隣接して Tuttleman Learning Center があり、1階部分で図書館とラーニングセンターが接続されている。ここではセルフラーニング用のPCが配置されていると

ともに、Writing Center も設けられている。Writing Center は 4 名のスタッフと 24 名の Tutoring staff、5 名の Office assistants からなる充実した組織である。「we provide one-on-one support for writers」(下線は筆者) という表現に代表されるようにキメの細かい指導方針となっている。相談は①予約なし、②予約制、③メール制の 3 つの方法があり、学生の多様な要求に応えるものとなっている。ただ、これらのセンターと図書館の連携については、施設が隣接している以外は具体的な言及はなかった。しかし、図書館は TLT Group (Teaching, Learning, and Technology) という faculty と librarians と technologists が teaching について研究する professional development の組織に機関加盟しており、恒常的な支援体制は追求されている。

○OD 活動について

テンプル大学図書館では、OD 活動として以下のような組織や取り組みがなされている。

①Academic Assembly of Librarians

Librarians の professional development 団体であり、学術的側面が強調されている。

②Library Staff Council

Library Staff と library administration との意見調整を行う管理運営的組織である。

③Staff Recognition Award

図書館スタッフの顕彰制度である。

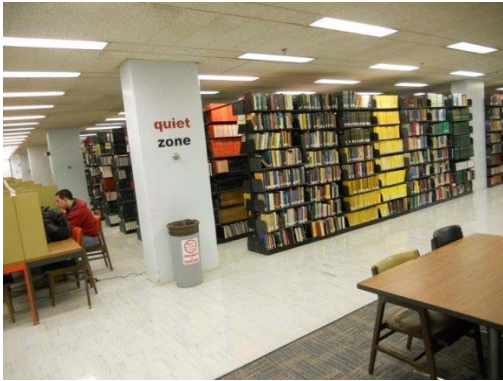
図書館ではアカデミックスタッフとアドミニストレイティブスタッフが混在して業務を展開しており、このような重層的な OD 活動が行われていると思われる。この点は日本とは全く異なっている。



<図書館外観>



<閲覧席の様子>



< Quiet Zone >



< 閲覧席の様子 >



< カフェ >



< Writing Center >



< SMART BOARD >



< Classroom130 >

2) Drexel University (ドレクセル大学)

【対応者】

- ① Ms. Danuta.A.Nitecki (Dean of Libraries / Professor, The iSchool, College of Information Science and Technology)
- ② Ms. Ann C. Yurcaba (Director of Library Administrative Services)

<大学概要>

所在地	ペンシルベニア州 フィラデルフィア
WEB ページ URL	http://www.drexel.edu/academics/libraries/
創立	1891 年
大学種別	4 年生、大規模、Private、共学
取得できる学位	Certificate、Associate、Bachelor's、Master's、Doctoral
カーネギー分類	Research – High Research Activity
立地	巨大都市、都市型、Residential campus
大学宿舎	1 年生：91%、全学部生：25%
学生数	学部：16,616 名、大学院：9,516 名
学生教員比	10:1
学費	州内出身：\$37,505、州外出身：\$37,505
アカデミック・サポート・サービス	Learning center、Pre-admission summer program、Reduced course load、Remedial instruction、Study skills assistance、Tutoring、Writing center
ア krediyetasyon 機関	Middle States Association of Colleges and Schools

<図書館の運営等の特徴>

○W.W.Hagerty Library の概要

ドレクセル大学はフィラデルフィア駅から徒歩 5 分程度にある都心型大学である。ペンシルベニア大学ともほぼ隣接しており、一体は学生街の様相を呈している。

中央館は W.W.Hagerty Library であり、その他に Hahnemann Library、Queen Lane Library、Library Learning Terrace 等がある。館長の Danuta 女史は、iScholl の教授であり、同大学はかねてから図書館情報学が盛んである。同大学の Library & Information Science の修士課程は ALA (American Library Association) の認定校 (全米で 57 校) の一つである。

Hagerty Library は、フィラデルフィア駅に続く幹線道路の交差点に面しており、一般市民の利用にも便利な立地にある。1 階は各種サービスカウンター、Group Study Area、Reference Librarians の個室の他、Career Services の対応場所もあり、図書館と他部署と

の連携がなされている。1階奥は Bookmark Café となっている。2階は書架と管理部門である。地階は Group Study Area や Lounge を中心に、Learning Lab や Computer Lab、また図書館情報学の授業を行う Classroom も設けられている。図書等の返却切れについては、罰金を科している（図書は1日 25cents、DVD は一日\$1）とのことである。

○A LEARNING ENTERPRISE

ドレクセル大学図書館の Mission Statement の冒頭は *Drexel University Libraries is a learning enterprise*. (下線は筆者) というフレーズで始まっている。そして、このコンセプトに基づき、図書館の戦略計画 (Strategic Plan : 2012-2017) が立てられている。この戦略計画は、大学のマスタープラン (Drexel University Strategic 2012-2017) から派生しており、大学の基本方針と図書館政策が連動している。図書館の戦略計画は Access、Connections、Environment、Organization のそれぞれの面から構成されている。

○A PERSONAL APPROACH

Personal Librarian Program は、新入生向けの図書館サービスである。同プログラムは新入生一人一人について担当する Librarian を特定し、利用者サービスや資料サービスを提供している。このプログラムは 2010 年秋学期から導入され、26 人の Librarian が 2,800 人を超える新入生を担当している。この取り組みは高等教育や大学図書館関係の学術雑誌等にも広く紹介され、その認知度が高まっている。

Workshops や Instruction も幅広く展開されている。その内容は図書館関係に関わらず Athletics, Time Management, Teamwork Success, Study Break Yoga (Athletics), Great visuals for presentations (Libraries) と多岐に及んでいる。

Kiosk That Dispenses Macbooks for student Use は Macbook の自動貸出装置であり、中央館のカフェに置かれ、利用者の利便性に大きく貢献している。

Library Learning Terrace は図書館外に設置されたラーニング・コモンズである。正課はもとより、先の図書館ワークショップにも広く利用されている。またこの施設は Personal Librarian Program サービスの重要な展開拠点ともなっている。



<図書館外観>



<ドレクセル大学のシンボル>



<エントランスホール>



<ラウンジ>



<カフェ>



<Macの自動貸出機>



<グループスタディエリア>



<Library Learning Terrace>

3) University of Pennsylvania (ペンシルベニア大学)

【対応者】

- ①Ms. Molly C.Des Jardin (Japanese Studies Librarian)
- ②Mr. Michael P. Williams (Library Specialist for the Japanese Collection)
- ③Mr. Eric Janec (Education Commons Librarian)

<大学概要>

所在地	ペンシルベニア州 フィラデルフィア
WEB ページ URL	http://www.library.upenn.edu/
創立	1740 年
大学種別	4 年生、中規模、Private、共学
取得できる学位	Associate、Bachelor's、Master's、Doctoral
カーネギー分類	Research – Very High Research Activity
立地	巨大都市、都市型、Residential campus
大学宿舎	1 年生：100%、全学部生：63%
学生数	学部：10,319 名、大学院：11,025 名
学生教員比	6：1
学費	州内出身：\$45,890、州外出身：\$45,890
アカデミック・サポート・サービス	Learning center、Pre-admission summer program、Remedial instruction、Study skills assistance、Tutoring、Writing center
ア krediyetasyon 機関	Middle States Association of Colleges and Schools

<図書館の運営等の特徴>

○Van Pelt-Dietrich Library Center の概要

ペンシルベニア大学はアイビーリーグの名門校であり、難関校である。キャンパスはピッツバーグ駅から徒歩 10 分程度であり、ドレクセル大学が隣接している。

中央館は Van Pelt-Dietrich Library Center である。館内では Information Commons がつとに有名であるが、全体としても地上 6 階地下 1 階の充実した図書館である。ペンシルベニア大学は、独立棟だけでも図書館は 12 館 (Communications、Law、Biomedical、Chemistry、Dental、Engineering、Business 等) あり、全米でも有数の規模である。

1 階は各種サービスカウンターがあり、奥が David B Weigle Information Commons となっている。このコモنزはいわゆる「ファミレス席」の発祥地ともいわれている。コモنزの後方は Information Processing Center である。また 2 階は Lippincott Library of the Wharton School というビジネス系の重厚な図書館となっている。その他各階には書架、

閲覧席とともに Librarian の個室が配置されている。5階には East Asia Collection があり、日本研究文献情報部が設けられており 専属の Japanese Studies Librarian が配属されている。地階には Mark's Café が設置されている。

○Library Workshops と Canvas

ペンシルベニア大学図書館では各種ワークショップが盛んであり、その内容は多岐に及んでいる。例えば、エクセル、ワード、パワーポイントの操作法、PDF の作成、iPad の使用法、ノートテイキング等、実務的な内容が多い。インフォメーションコモンズで開催されることが多いが、他の図書館でも行われている。また Canvas という Courseware でも開設されている。Canvas では訪問した 2013 年 11 月だけでも 26 のプログラムが実施され、これに対応したオフィスアワー等も開催されていた。これらのプログラムは学生だけでなく、教職員にも広く開放されている。

○Education Commons

ペンシルベニア大学図書館で最新の施設が Education Commons である。場所は中央図書館からかなり離れており、Franklin Field という大学の競技場の建物を改修して開設されたものである。ちなみに Education Commons の隣りはトレーニングセンターである。空きスペースを活用したため施設は細長い構造となっている。この施設は図書館とは明らかに離れた場所にあり、これまで図書館の中に開設されることの多かったアメリカのコモンズの中では異質なものである。施設の構成はグループ学習エリアとラウンジを主体としたものであり、図書資料等の配架はなされていない。Study and Collaboration を主眼とした自由な空間の印象を受けたが、図書館の管轄にあり Workshops や academic support、tutoring も実施されている。設計は青を基調とし、寝ころぶ空間も作られている斬新なもので、今後のアメリカのコモンズの一つの方向性を示しているように思われた。

○Building the Library of Tomorrow

図書館の充実のための寄付金計画である。ペンシルベニア大学ほどの名門大学であればこそ成り立つ指定寄付政策である。寄付対象は Information、Learning Centers、Librarian Ships、Innovation であり、Librarian の役割として以下のような重要な記述がなされている。

Each year, librarians work with hundreds of classes, teaching students how to evaluate and use information, and help them to develop research skills they will apply over a lifetime of learning. (下線は筆者)



<図書館外観>



<ファミレス席>



<Japanese Collection>



<Education Commons>



<グループ学習室>



<寛ぎゾーン>

4) Duquesne University (デュケイン大学)

【対応者】

- ①Ms.Allison B.BRUNGARD (Reference and Instruction Librarian)
- ②Ms.Maureen Daina Sasso (MLS/ Director, Information Services Divison)
- ③Mr.Joseph C.Kush (Ph.D/ Associate Professor/ Instructional Technology Program/
Department of Instruction and Leadership in Education)

<大学概要>

所在地	ペンシルベニア州 ピッツバーグ
WEB ページ URL	http://www.duq.edu/academics/gumberg-library
創立	1878 年
大学種別	4 年生、中規模、Private、共学
取得できる学位	Bachelor's、Master's、Doctoral
カーネギー分類	Research – High Research Activity
立地	大都市、都市型、Residential campus
大学宿舎	1 年生：92%、全学部生：61%
学生数	学部：5,970 名、大学院：3,934 名
学生教員比	15:1
学費	州内出身：\$31,385、州外出身：\$31,385
アカデミック・サポート・サービス	Learning center、Pre-admission summer program、Reduced course load、Remedial instruction、Study skills assistance、Tutoring、Writing center
アクレディテーション機関	Middle States Association of Colleges and Schools

<図書館の運営等の特徴>

○Gumberg Library の概要

デュケイン大学はピッツバーグの中心部に近いカトリック系の大学である。リベラルアーツを重視するとともに、法学教育に定評がありニュルンベルク裁判等の貴重資料も有している。

図書館は Gumberg Library 一館である。5 階建であり 2 階が入館口となっている。1 階は Simon Silverman Phenomenology Center というスピリチュアル現象の研究所と University Archives が設置されている。2 階はサービスカウンターと Graduate Study Room、3 階が Public Computers と Electronic classroom となっており、Library faculty による授業もなされている。4 階と 5 階は Collaborative Study Areas であり閲覧室や学習室が配された自由な空間である。

○Curriculum Center

さらに5階には教育学部に関係する Maureen P.Sullivan Curriculum Center という幼児教育のカリキュラムセンターがあり絵本や教材がたくさん収集されている。ここでは、音楽教育、スクールカウンセリング、学校心理学などの様々なワークショップも行われている。先の Phenomenology Center とともに、図書館はこの大学の特色ある教育・研究の拠点としても機能している。見学当日には、Career Services Center の出張カウンターが2階に設けられており、他部署との連携も良好のようであった。

図書館には 65 名の職員が関わっており、うち 14 名が Librarian とのことである。Librarian は日常から学生に積極的な働きかけをおこない、図書館の存在価値の普及に努めている。チャットへの返事は 24 時間、メールへの返事は 1 時間以内を心がけているとのことである。また学生による図書館ボランティアも盛んで、書架の整理等がなされている。

○Strategic Plan と OD

University Library Committee のもと、図書館の戦略計画が立てられている。「GUMBERG LIBRARY STRATEGIC PLAN 2010-2015」はその副題が Partners in Learning and Research であり、真新しい言葉を使わない堅実な計画である。5 年にわたる中期計画であるが、毎年 Annual Report でその検証がなされている。検証の観点には、以下の 4 つのアクションプランである。①Enhance our user's experience、②Optimize access to information resources、③Enhance the library's physical and virtual environments、④Strengthen the effectiveness and efficiency of library operations。

このアクションプラン④では特に OD が求められており、Organization Task Force が設けられ、図書館員の地位や役割が検証されている。



<図書館外観>



<エントランス>



< 閲覧席 >



< 大学アーカイブズ >



< 閲覧席 >



< Curriculum Center >



< Collaborative Study Areas >



< Career Center の出張ブース >

5) Chatham University (チャタム大学)

【対応者】

①Ms. Dana Mastroianni (Reference & Web Librarian)

<大学概要>

所在地	ペンシルベニア州 ピッツバーグ
WEB ページ URL	http://library.chatham.edu/
創立	1869 年
大学種別	4 年生、小規模、Private、女子大学、Liberal arts college
取得できる学位	Bachelor's、Master's、Doctoral
カーネギー分類	Master's—Larger Programs
立地	大都市、都市型、Residential campus
大学宿舎	1 年生：82%、全学部生：46%
学生数	学部：977 名、大学院：1,193 名
学生教員比	10:1
学費	州内出身：\$32,454、州外出身：\$32,454
アカデミック・サポート・サービス	Learning center、Reduced course load、Remedial instruction、Study skills assistance、Tutoring、Writing center
ア krediyetasyon 機関	Middle States Association of Colleges and Schools

<図書館の運営等の特徴>

○Jennie King Mellon Library

チャタム大学は、ピッツバーグの郊外の閑静な住宅街に隣接する小規模の女子大学である。Fostering women's growth as leaders を教育目的の一つとして掲げている。

図書館は、Jennie King Mellon Library 一館である。地下階 1 階付 3 階建ての小規模な建物で、主な用途は地階が Individual study room、1 階が総合カウンター、2 階が Quiet floor、3 階が Career Development となっている。学位を有している専任の司書は 6 名で、他に 5 名のパート司書で構成されている。図書館は大規模大学の学生会館 (Union) の機能も担っているため、複合的な施設となっているとの説明であった。

○Library Workshops

オンライン化により電子資料の比重が増えてきたことから、図書館で開催されるオリエンテーションも変化を見せてきている。これまでは初歩的な図書館の使用法が中心であったが、より具体的なコンピュータリテラシーにその比重が移ってきているとのことである。

Library Workshops では、Mendeley や Zotero といったレファレンスツールの使用法に加えて、Basic Databases、Plagiarism & Citation、Evaluating Resources といったより学術の基礎的な内容も含まれてきている。これらの Workshops については、教員との連携が特に重要であるとのことである。Librarian は、担当する学部が決められており、年に一度程度ではあるが学部の会議にも出ているとのことである。

○Personal Librarian Program

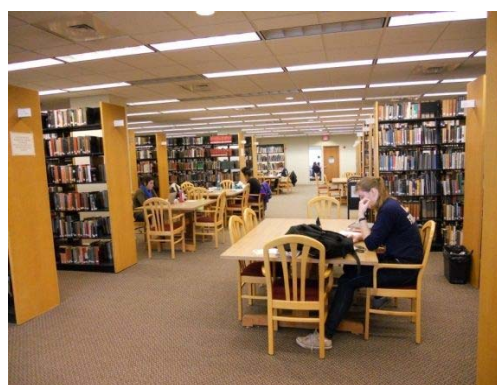
2011 年度から始まった新しい図書館サービスである。Workshops からより進んだかたちで、受け持ち学生に対し、Librarian が直接にメールを送り、相互交流を行うものである。メールの内容は Workshops のお知らせや、resources やその他 services に関するものである。このプログラムはドレクセル大学でも同様に展開されており、米国における一つの潮流となっているのかもしれない。Periodic なメールのやりとりを行う Librarian は Gateway Librarian とも呼ばれ、その存在は学生にとっても欠かせないものとなりつつある。

○Professional Development

SD については、Professional Development として定義づけられ、Annual Report でも重要な位置づけとなっている。Annual Report には専任司書 6 名のその年の仕事や業績が詳細に記録されている。Librarian が専門職として位置づけられていることの証左であろう。今回対応頂いた Dana 女史も OCLC のセミナーでのプレゼンテーションや、Blended Librarian としての活躍が評価されている。



<図書館外観>



<閲覧席>



<コンピューター実習室>



<グループ学習室>



<閲覧室>



<校舎>



<キャンパス風景>



<キャンパス風景>

6) Point Park University (ポイントパーク大学)

【対応者】

- ①Ms. Elizabeth Evans (Library Director)
- ②Mr. Phillip Harrity (Access Services and Archival Coordinator)

<大学概要>

所在地	ペンシルベニア州 ピッツバーグ
WEB ページ URL	http://www.pointpark.edu/Academics/AcademicSupport/Library
創立	1960 年
大学種別	4 年生、中規模、Private、共学
取得できる学位	Certificate、Associate、Bachelor's、Master's
カーネギー分類	Master's – Larger Programs
立地	大都市、都市型、Commuter campus
大学宿舎	1 年生：77%、全学部生：29%
学生数	学部：3,226 名、大学院：615 名
学生教員比	13:1
学費	州内出身：\$26,170、州外出身：\$26,170
アカデミック・サポート・サービス	Learning center、Pre-admission summer program、Reduced course load、Remedial instruction、Study skills assistance、Tutoring
アクレディテーション機関	Middle States Association of Colleges and Schools

<図書館の運営等の特徴>

○Point Park Library

ポイントパーク大学はピッツバーグのダウンタウンにある中規模の大学で、芸術や情報関係の学部等が有名である。キャンパスは、ダウンタウンのオフィスビルに点在している。

図書館は Point Park Library 1 館である。図書館の建物はもとは銀行であり、大金庫が閲覧席としても利用されているユニークな仕様となっている。1 階が総合カウンターとカフェ、2 階が書架と閲覧席、地階は地域放送を行うスタジオの配置となっている。芸術系の学部を有する大学のため随所に学生たちによるデコレーションがなされていた。また入館口には熱帯魚の水槽が置かれているが、これは「図書館にもペットが欲しい」という学生の要望に応じてのものらしい。

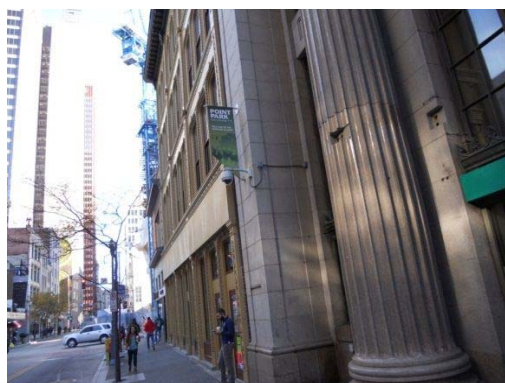
○Information Literacy

図書館では ACRL の Information Literacy Competency Standards for Higher Education に基づき、Information Literacy 教育も展開している。その際の分野基準は Science & Engineering である。また大学独自でも Point Park University Library's Basic Literacy 等を作成し、学生たちへの周知に努めている。Plagiarism Prevention Tutorial、Avoiding Tutorial、Plagiarism Game といった具合に Plagiarism (剽窃) についてのリテラシー教育が盛んである。日本においてはライティングセンターで行われていることが多いが、図書館とライティングセンターの一体化が進んでいると思われる。

○CONDITIONAL ADMITTANCE と SMART START

ポイントパーク大学はコミュニティカレッジからの編入生も多いこともあり、導入期教育や入学前教育も盛んであり、図書館も一定の役割を果たしている。2013 年は 8 月に約 2 週間かけて行い、参加者は約 70 名であったとのことである。これまでは約 4 週かけていたが参加者間が 12 名程度と少なく、期間を短縮したらしい。その際には大学の寮も利用でき、食費 (\$175) 以外は学費に含まれている。Academic experience を体得させるプログラムであり Librarian も重要な役割を担っており、3 人の Librarian が 3 クラスを受け持っている。そして 1 年間は、個人的にコンタクトをとるように努めているとのことである。

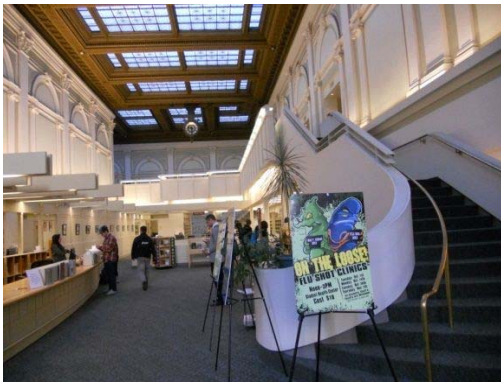
大学では Work Study も実施されている。貸出業務、書架整理、メンテナンス等の業務を学生が担っている。ポイントパーク大学では、Conditional Admittance (仮入学) の制度があり、学業面では SMART START、学費面では Work Study による援助が行われている。



<図書館外観>



<総合カウンター>



<エントランスロビー>



<金庫室を利用した閲覧席>



<中2階から>



<映像関係実習室>



<ケーブルテレビのスタジオ>



<クリスマス仮装コンテスト写真>

7) University of Pittsburgh (ピッツバーグ大学)

【対応者】

- ①Ms. Marian C.Hampton (Coordinator of Library Instruction Liaison to iSchool and Theatre Arts)
- ②Xiuying Zou (Public Services Librarian East Asian Library)
- ③Ms. Judith A. Brink (Head Librarian/George M. Bevier Engineering Library)

<大学概要>

所在地	ペンシルベニア州 ピッツバーグ
WEB ページ URL	http://www.pitt.edu/libraries
創立	1787 年
大学種別	4 年生、大規模、Public、共学
取得できる学位	Certificate、Bachelor's、Master's、Doctoral
カーネギー分類	Research – Very High Research Activity
立地	大都市、都市型、Residential campus
大学宿舎	1 年生：97%、全学部生：44%
学生数	学部：18,615 名、大学院：10,034 名
学生教員比	14:1
学費	州内出身：\$17,100、州外出身：\$27,106
アカデミック・サポート・サービス	Learning center、Reduced course load、Remedial instruction、Study skills assistance、Tutoring、Writing center
アクレディテーション機関	Middle States Association of Colleges and Schools

<図書館の運営等の特徴>

○Hillman Library と Bevier Engineering Library

ピッツバーグ大学は、医学部が有名な公立大学である。ピッツバーグのダウンタウンからバスで 15 分位の位置にあり、公共図書館や音楽ホール、カーネギーメロン大学が隣接し、大学街が形成されている。今回は、中央館である Hillman Library と工学部図書館である Bevier Engineering Library を訪ねた。

Bevier Engineering Library は工学部の専門図書館であり、独立棟ではなく、工学部の校舎の一部にある図書室的なスタイルである。スタッフも 4 名の小所帯である。

Hillman Library はピッツバーグ公共図書館の正面に立つ、ピッツバーグ大学の中央館である。地上 4 階地下 1 階建てで、地下がメイン入口となっている。地下は Study Area が中心で、Research Computer が並ぶ Research & Learning コーナーがある。もともこの場

所は多くの書架が並んでいたが、学習スペース確保のため、構外の保存庫に移設されたい。地階奥は Cup & Chaucer Café となっており、定期的にコンサートも開催されている。1階から4階までは、書庫や閲覧席であるが、随所に Study Area や Computer Lab が設置されており、学習図書館化が進行している。また2階には Subject Specialist Offices があり、いわゆる Subject Librarian が従事している。

○ULS (University Library System) と Librarian 政策の変化

当日は先ず Engineering Library の Judith 女史からピッツバーグ大学図書館の Librarian 政策について伺った。Judith 女史はもともとは英文学の専門であるが、中学校の Librarian やカーネギーメロン大学の Librarian を経て現職にある。ピッツバーグ大学図書館は大規模な図書館であるが、その政策も最近大きく変化してきているとのことである。以前は学科の数より Librarian の数が多かったが、ここ5年の間に3つの専門図書館が閉鎖され、縮小化が進行している。Subject Librarian もかつては、Hillman Library の1階に居室があったが、2008年から3階の狭いスペースに移ったとのことである。Hillman Library は2014年度から本格的な学習用図書館に転換するために大改修が進行している。

これら図書館政策の変化に対応するため司書の役割も変化が生じてきている。これまでは受け身の仕事が多かったが、これからはそれぞれのクラスに出かけていき、学生たちにインストラクションする仕掛けが必要になってきているとのことである。libguides というツールを使い pitt.libguides というかたちで Librarian たちはそれぞれの担当する subject についての情報を発信し続けるようになってきている。図書館の OCW もあり、ULS というシステムでは Librarian が The Assignments という形で学生たちに様々な課題を科せるようになってきている。論文の書き方の指導、特に citation は Librarian の重要な役割であるとのことであった。

○MASTER Librarian

次に Hillma Library の Marian 女史から図書館政策のお話を伺った。女史は、同大学の iSchool の担当もされている。女史の言葉によれば、現在は図書館や Librarian に対して Very Big Cultural Change が進行しているとのことである。本の価値の減少とともに、図書館や Librarian の存在そのものが問われるようになってきているのである。オーストラリアの大学の論文に、学生の成績と図書館での本の借用や DB の利用の相関関係を調べた調査（この方法には個人情報に触れる問題は残るが・・・）があったが、このように学生のアカデミックな達成度に図書館がどのように貢献するかが問われてきているのである。

Liaison Librarian は、ピッツバーグ大学やアリゾナ大学、ミネソタ大学で有名であるが、学習をコーディネートし、マネジメントする能力がより強く求められている。教員との連携はもちろんのこと、4年館を通じた学習支援の Librarian は重要な実践者である。カリキュラムマッピングやコースのマネジメントなど教育学の素養も求められるようになってき

ている。学部の Committee やインストラクターに対しても、Librarian から積極的な働きかけを行っていくことが重要である。また図書館のリソースで何が提供できるかを明らかにすることも重要である。ただ Librarian がこのような努力をしても、なかなか学部からは認めてもらえないというもどかしさもあるようである。Ph.D を有している Librarian であっても学部の一員としての壁は高いようである。Administrative Offices と Librarian との関係も緊張感は絶えないとのことである。Marian 女史が、Master Librarian という言葉を使われていたのが印象的だった。

OLONG RANGE PLAN 2011-2014

ピッツバーグ大学図書館でも長期計画が策定されている。Mission Statement にもとづき以下の 5 点にわたり Goals が定義されている。① Information Resources and Collections、② Infrastructure、③ Services、④ Innovation in Scholarly Communication、⑤ Organizational Agility。

やはり研究大学であることから、学習支援よりは Scholarly な面に重視があるように思われる内容である。



<図書館外観 中央館>



<工学部図書館 閲覧席>



<中央館 学習スペース>



<中央館 閲覧席>



<中央館 学習スペース>



<中央館 学習スペースと旧書架>



<中央館 Cafe>



<中央館 Cafe ラウンジ>



<中央館 Cafe 奥>



<学びの聖堂 日本式教室>



<THE CATHEDRAL OF EARARNING>



<学びの聖堂内 学習風景>

8) Carnegie Mellon University (カーネギーメロン大学)

【対応者】

- ① Mr. Ethan Pullman (Humanities Librarian-English and Philosophy Liaison/
University Libraries)
- ② Mr. Matthew R. Marsteller (Head, Science Libraries/ Senior Librarian/
Roger Sorrells Engineering & Science Library)

<大学概要>

所在地	ペンシルベニア州 ピッツバーグ
WEB ページ URL	http://search.library.cmu.edu/
創立	1900 年
大学種別	4 年生、中規模、Private、共学
取得できる学位	Bachelor's、Master's、Doctoral
カーネギー分類	Research – Very High Research Activity
立地	大都市、都市型、Residential campus
大学宿舎	1 年生：99%、全学部生：38%
学生数	学部：6,306 名、大学院：6,685 名
学生教員比	13:1
学費	州内出身：\$47,642、州外出身：\$47,642
アカデミック・サポート・サービス	Learning center、Pre-admission summer program、Study skills assistance、Tutoring、Writing center
ア krediyteyeshyon 機関	Middle States Association of Colleges Schools

<図書館の運営等の特徴>

○ Hunt Library と Roger Sorrells Engineering & Science Library

カーネギーメロン大学は工学系学部がとくに有名であるが、音楽など芸術系学部も充実した総合大学である。ピッツバーグ大学に隣接し、ピッツバーグの文教街を構成している。

中央館はキャンパスの中央部にある Hunt Library である。4階建地下1階の建物であり、1階が総合カウンター、Group Study Rooms、Cafe 等、2階以上は書架、閲覧席、大学資料室等となっている。1階には Massage Chair がありユニークである。地階は Computing Services 等の施設が展開されている。

Sorrells Engineering & Science Library は Wean Hall 内にある専門図書館である。最近改修が行われ学習空間が新しくなっている。隣接して CTC (Collaborative Teaching Cluster) という施設がある。CTC は Dell や Apple の PC 等が設置されており、同大学の特色ある学習支援空間の一つである。同大学には同種の Teaching Clusters が各建屋の随所

に設置されて、教員と学生の交流の場所となっている。

○Liaison Librarians

カーネギーメロン大学では次のように Liaison Librarians が広く認知されている。

Each department or school at Carnegie Mellon has a librarian assigned to it who serves as its liaison

具体的に約 40 ほどの学部やコースに対してそれを担当する Librarian が割り当てられ (一人の Librarian が複数を受け持つ場合もある)、学生や教員との接点を有することとなっている。メール等での対応に加えて、時には実地にクラスに出向いての指導も行われているとのことである。

○Global Communication Center (GCC)

GCC という施設が 2012 年から中央館に設置されている。これは留学生向けの施設ではなく広く学生に開かれた施設である。ここでは以下のように、基本的には一対一で様々なサービスが提供されている。

We offer free one-on-one tutoring and workshops for any student at any level from any academic discipline

センターのスタッフは、修辞学等の博士号を取得しており、チューター等も多数雇用されている。ワークショップとして、Designing Effective PowerPoint、Presentations Designing Scientific Poster、Team Communications といった実務的なセッションも多く開催されている。図書館員が直接関与しているものではないが、図書館で展開されている学習支援の一環である。



< Hunt Library 外観 >



< 入館口 >



<Cafe>



<ウォータークーラー>



<ラウンジ>



<閲覧席>



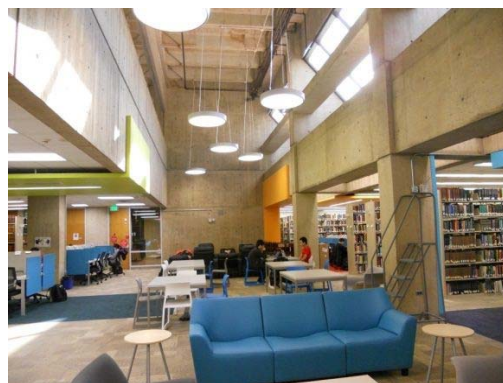
<Group Study>



<Engineering & Science Library>



<コンセント>



<吹き抜け>

Ⅲ. POD 参加報告

本章では、今回の海外図書館事情調査のもう一つの目的であった POD の参加報告を行うこととする。本事情調査は、米国の大学図書館の組織開発の実態を、特に図書館と学習支援の諸課題について焦点をあてて実施することが主たる目的であった。そのため、米国の学習支援の実践者が多く集う POD に参加し、効率的に学習支援のトレンドに触れることを計画した。今回の図書館をペンシルベニア州に設定したのも、POD の大会が同州のピッツバーグで開催するからであり、この開催に合わせてピッツバーグとフィラデルフィアの大学図書館を訪問した。

POD (The Professional and Organizational Development) は、アメリカ最大のファカルティ・ディベロッパーの組織であり、1975 年に設立され、現在では 1,800 名を超える会員を有しているとのことである。年次大会では日本からの参加者も含め、FD の様々な課題が発表され、共有されることとなった。

図書館は、直接に FD を実施する部署ではないが、図書館の学習機能が重視されつつある現在において、FD の諸課題について米国における最新の議論に触れることは、重要なことである。

○POD Network について

上述のとおり POD は現在 1,800 名を超える会員からなっており、アメリカ合衆国、カナダを中心として、その他 20 余りの国から構成されている。もちろんその一つが日本である。日本からの参加者は以前に比較して減少したとはいえ、今回も 10 名余りが参加していた。ちなみに全体では、今回大会は 800 名近い参加者があった。

POD は高等教育における教育方法やそのための組織開発について、その示唆と支援をすることを目的として成立した組織である。そのため、年次大会を中心とした会員の経験や国境を越えた相互交流の場を重視し、その目的の達成が継続的に努められている。

○POD のミッションについて

POD では以下の 3 点の開発 (①Faculty development、②Instructional development、③Organizational development) をとおした総合的な人間発達 (Human Development) が志向されている。そして、POD のいうところの人間発達とは、もちろん学生の成長や発達であるが、広い意味では教育に携わる教員や FD 担当者のそれをも包摂した概念であるともいえよう。

そして、POD では人それぞれは、個人としてはもちろんのこと、グループとしても価値を有しているとの認識に立ち、教育や教授法、組織開発をおとした学生の成長の議論が繰り広げられているのである。

○PODの年次大会について

年次大会の参加者は、教員が中心であるが、FD開発者やFD担当者も多く参加している。その他、大学の経営管理者、大学院生、コンサルタント業者、出版業者など多くの職位や職種により構成されており、そのような多様性が他の学会や研究集会にない特色であるといえよう。

年次大会では全体をとおして、スクール形式の一方向的な形態ではなく、グループディスカッション等の相互交流的な形態が多用されており、参加者の当事者意識が涵養される仕組みとなっている。また年次大会においては、同僚性 (colleagues) と多様性 (diversity) を重視したセッションの設定などが大きく配慮されている。

年次大会は、11月6日(水)午後～10日(日)午前までが全日程であるが、中の3日間(7日～9日)がメインの日程である。この3日間において、基調講演やインタラクティブ・セッション、ラウンドテーブルセッション、ポスターセッションが交互かつ重層的に設定されており、参加者は各自の関心と興味に基づき、それらの会場を渡り歩くことになる。また朝食やランチを食べながらの特別セッションも用意されている。これらの多様なプログラムは、基本的には参加者が一同に同一ホテルに宿泊し、そこで開催される大会であるからなしえることであると思われた。

○セッショントピックスについて

インタラクティブやラウンドテーブルの各セッションは、当然にFDについての課題が議論されているのであるが、その中でも特に下記の事項が Session Topics として重点的に取り上げられている。

Adjunct Professional Development / Administration / Assessment / Diversity / Faculty Professional Development / Graduate Student Professional Development / Organizational Development / Professional Development / Programs / Research / Retention / SoTL / Start-up / Sustainability / Teaching & Learning / Technology

これらはいわば各セッションのキーワードであり、このキーワードをもとにして参加者は各セッションの方向性を把握し、議論に参加していくことになる。またこれらのキーワードの中には、現在の日本の高等教育の現場において既に重要な概念となったもの、またこれからその重要性が増加していくものを多く確認することが出来る。

たとえば「Teaching & Learning」の Session Topics の説明は「Practices, processes, theories, techniques related to classroom and other teaching and learning」と定義されている。これについては日本においてもほぼ同じ文脈での議論が展開されているといえよう。

○図書館に関連した報告事例から

図書館や図書館員をキーワードとして、たとえば以下のようなラウンドテーブルやポスターセッションが行われたのでそのアブストラクトを紹介する。

◎Faculty Writing Circles: Freedom to Explore and Flourish

◇ *Ludwika Goodson, Martha Coussement, and Shannon Johnson, IPFW*

◇ Asked to launch a faculty writing circle, our Center joined faculty to shape its mission and give members a “safe space,” a “source of accountability” (Nole, Hart, Soled, 2010), and writing support. We will report on milestones, resulting publications and presentations, library collaboration, and university-wide writing initiatives showing the circle's evolution into a community of practice and how it has “harnessed the multiplier effects of collaborative processes...building upon informal networks within entities” (Nagy & Burch, 2009). By comparing this circle to those at other universities, we also will explore strategies and conditions that stimulate scholarly writing and benefit stakeholders.

◇Topics: Faculty Professional Development, SoTL

◇Audience: Faculty (conference attendees who are faculty and also part-time developers)

*Writing Circlesの立ち上げに関して、図書館との連携についても触れられた報告であった。ライティングセンターの研究は、関西大学と津田塾大学との間でも大学間連携共同教育推進事業として、取り組みがなされているが、図書館との連携は重要な成功の要件ともなっている。米国においてもその認識は同様である。

◎ Assessment in Action: Inquiry and Discovery Connecting Libraries and Students

◇ *Kara Malenfant, Association of College and Research Libraries; Lisa Janicke Hinchliffe, University of Illinois*

◇ Academic librarians are connecting with campus partners in novel ways to question and discover how they bring value to their institutions. To foster these partnerships, the Association of College and Research Libraries (ACRL) launched “Assessment in Action: Academic Libraries and Student Success” a three year program to aid 300 postsecondary institutions of all types as they create engaged libraries of the future. This poster will report on the assessment work of the first 75 institutions. Learn about the questions they are exploring as they develop and implement action-learning projects on campus and how ACRL is developing this assessment community of practice.

◇Topics: Assessment, Teaching & Learning

◇Audience: Open to all POD members

*ACRL の図書館の評価基準にもとづく、アカデミック・ライブラリアンと学生の関係についてのパネルセッションであった。ACRL (Association of College and Research Libraries) の新たな「高等教育機関における図書館基準」には、図書館の果たすべき学修支援機能が明記(基準3「教育的役割」では教育機関としての役割の実践、基準6「スペース」では知的コモンズの実現、基準8「職員」では十分な量と高い品質の人材の提供)され、さらに基準のパフォーマンス指標で、学習支援に関わる詳細な定義も施されたとのことである。米国においては、図書館職員には教員と共同した教育主体者としての新たな役割が大きく期待されることとなっている。(この点の考察は、永田治樹「図書館は大学にどの程度の効果をもたらしているか—ACRL(米国大学図書館協会)の新『高等教育機関における図書館基準』—」『図書館雑誌』106巻11号,774-775に詳しい)。

また以下のようにアクティブ・ラーニングのための環境設定に関する報告もあった。

◎ Building an Active Learning Environment from the Ground Up

◇*Laura Bestler, Iowa State University*

◇This session will showcase how campus entities worked collaboratively to design, implement and evaluate an active learning classroom. The assessment tools included multiple instructor surveys regarding how the space was used and the impact it had on their teaching. As well, data from students regarding how the classroom impacted their learning and their instructors approach to teaching was also collected and evaluated. Results from this research are being used across the university as decisions are made to create additional dynamic learning spaces on campus.

◇Topics: Assessment, Teaching & Learning

◇Audience: Open to all POD members

*この報告は、ラーニングコモンズの学内における導入事例のパネル紹介であり、平易な内容であった。コモンズの先進国であるアメリカにおいても、まだこのような導入紹介的な報告が成り立つことが不思議であった。

○Connect・Risk・Learn

今回の POD の大会のテーマは「Connect・Risk・Learn」という表現であり、「接続・リスク・学び」と直訳できる。ではいったい、この大会テーマが含意しているものは何なのであろうか。学びの接続に対するリスクなのか、リスクをおかしても学びを接続するという意味なのであろうか。PODの年次大会では、最先端のFDの理論や実践例が報告・紹介されており、その実践には多くのリスクが伴うということなのかもしれない。

学習法の転換期にあたり、その導入にはリスクがつきものである、それをおかしても、学びに到達することが肝要なのである。図書館における学習支援の展開にあっても、新た

な地平を切り拓く意思が個々の図書館員に求められているといえよう。



<POD 総会の様子>



<ワークショップ>



<ワークショップ>



<ポスターセッション>



<ポスターセッション>



<ポスターセッション>

IV. 結びにかえて

「大学図書館は従来ややもすれば学生に対するサービスをおろそかにしてきたが、最近教育における図書館の役割が再認識され、ハーバード大学がとくに学部学生のために機能的なラモント図書館 (*Lamont Library*) を設立したが、これにならって学部図書館を設立する大学が幾つか続いている。わが国ではまだ大学の教育は講義システムに終始するところが多く、有効に図書館資料を利用して、討議等によって学習の実質化を深めていく方法が必ずしも一般化していない。」(下線は筆者)

○古くて新しい議論

冒頭の文章は、『教育学大事典』(第一法規出版)の中の、大学図書館に関する記述の主要な箇所の抜粋である。この大事典の発刊は1978年であるから、約35年前の記述である。

(ちなみに筆者はまだ高校生であった。)しかし、驚くばかりに、現状の大学図書館を巡る問題意識に合致した内容となっている。大学図書館を巡るというよりは、教育に関する大きな課題が35年を経ても解決していないのが日本の現状といっても過言ではない

「教育から学習への転換」というキャッチフレーズが一般化し、学習における大学図書館の役割がクローズアップされたのは、多くの一般的大学にとっては比較的まだ最近のことである。平成25年度の学術情報基盤実態調査をみても、アクティブ・ラーニングスペースを設置している大学図書館は306館であり、設置率は20.6%である。急速にその設置率は増加しているが、日本の大学において、アクティブ・ラーニングスペースはまだ定着したとは言いがたい状況である。さらにアクティブ・ラーニングスペースの設置が、大学図書館における学習支援の最終目的となってもいけない。先の定義にもあるように、大学図書館には「有効に図書館資料を利用して、討議等によって学習の実質化を深めていくこと」が求められているのである。

○事情調査を終えて—Connectする存在へ

このアクティブ・ラーニングスペースの実質化については、今回のペンシルベニア州の諸大学の事例から多くの示唆を得ることができた。今回の事情調査にあたっては、その目的を「組織開発」と「学習支援」の二つに限定した。現在の日本において、大学図書館には学習支援が強く求められるようになってきたが、そのためには図書館自身の組織開発が重要であると考えたからである。事情調査は、それぞれの対応者へのヒヤリング等の断片的なものであり、また学習支援を主たる業務としていない担当者である場合もあった。しかし、幸いなことにDeanやDirectorといった高次のポジションの人への調査が可能となり、個々の大学の図書館政策や職員養成の課題についても聞き及ぶことができたことは大きな収穫であった。

組織開発(OD)の観点でいえば、アメリカの大学図書館は明確にミッションが定義され

ており、それに基づいた戦略計画 (**Strategic Plan**) が徹底されている。アクレディテーションが早くから定着し、様々な局面で評価の必要性が生じてきたからであるともいえる。翻って、日本においては評価の概念すら明確ではなく、その定着にはほど遠い状況にある。ただアメリカの場合はその計画性が明確化過ぎるきらいもある。**Task Force** という言葉も今回よく聞くこととなったが、この用語はもともとは軍隊用語である。筆者には戦略性・計画性にもほどよい柔軟性が必要であると思われるのである。

学習支援の諸課題については、予想より多くの事例を調査することができたが、その前に、やはり **Librarian** の存在について記述したい。今回も対応を頂いた方は、ほとんどが **Librarian** であり、私たちのような大学職員ではない。大学によっては、**Librarian** は **Faculty** の一員であり、教授会のメンバーの場合もある。また彼ら・彼女らは **Ph.D** 等の学位を有していることが多い。今回大学のうち、**iSchool** をもつドレクセル大学やピッツバーグ大学での **Librarian** の専門性は極めて高いものである。『**Digest of Education Statistics 2011**』には、大学図書館のフルタイム職員と **Librarian** の人数が比較されている。たとえばペンシルベニア大学ではフルタイム職員 370 人中 111 人が **Librarian** であり、ピッツバーグ大学では 382 人中 120 人が **Librarian** である。巨大な図書館組織の中のさらに一番大きな母集団が **Librarian** である。図書館運営が **Librarian** 中心となるのは必然の結果なのである。この意味では、**Librarian** という存在そのものがないわが国において、大学図書館の新たな展開を考えていく際には、アメリカモデルの継承だけでは限界がある。

そのような前提にたっても、アメリカの大学図書館に学ぶべき点は多い。先に紹介したように様々な **Workshops** が展開されているし、その内容も単なる図書館利用法を超えた学術的な内容にも関連している。また **Personal Approach**、**Personal Librarian**、**Smart Start** といった具合に用語は様々であるが、個々の **Librarian** と学生の接点が予想以上に大きかったことをあらためて知ることとなった。学生と図書館とをつなぐ **Liaison Librarian** の存在は日本でもよく知られているが、ここまで定着しているとは思えなかったのである。接点ということでは、**POD** のテーマの一つが **Connect** であったことから考えても、アメリカの高等教育の一つのキーワードとなっているのかもしれない。**Master Librarian** という言葉も印象的なものであった。「**Librarian** の鑑」とでもいうのであろうか。**Librarian** の専門職としての意識の高さを実感した。

今回の事情調査で得た米国大学図書館組織開発と学習支援の諸課題を、日本の大学図書館に直接運用することは、短期的には難しいかもしれない。しかし、学生と大学図書館とを **Connect** する存在として、日本の大学図書館員もその役割を担って行かなければならない。またそれら大学図書館員のはたらきの基盤として大学図書館のあり方や役割について、長期的な展望にたった組織開発がさらに求められている。

最後に、今回の海外図書館事情調査の研究助成を賜った私立大学図書館協会に対し、あらためてお礼を申し上げ、報告書を終えることとする。

以上